

野生生物と社会学会青年部会企画

『他分野のアプローチに触れる若手研究座談会－野生動物管理の学際的議論にむけて－』
報告書

パネルディスカッション

渡邊英之（東京大学大学院新領域創成科学研究科修士）

本稿では、本企画のパネルディスカッションについて総括する。パネルディスカッションでは、質疑応答を通して、各セッションを融合した議論を展開した

本企画『他分野のアプローチに触れる若手研究座談会－野生動物管理の学際的議論にむけて－』のキーワードは2つある。すなわち、『他分野連携』と『若手研究』である。企画の前半では、若手研究者がそれぞれの専門分野と野生動物マネジメントの関係についてレビューを行った。その各論がどのように連携できるのか、そして若手はどのように研究力を培うべきなのかについて、各演者が議論を交わした。

まず、若手の研究力を培ううえで、最初の勉強法・大切にすべき視点について議論が交わされた。ほとんどの演者が共通して大切にしていることは、「自分の基盤をつくる」ということであった。基盤をつくるためには、まずフィールドへ積極的に足を運ぶことが大切である。実際に様々なことを経験し、現場の様子を少しでも知ることが、自らの根幹を形成することにつながる。また、座学も同様に重要である。大学の授業や基礎的な学術書(附録)で勉強することで、自らの地力を鍛えることができる。積極的に外に出ながら、勉学に努める姿勢が重要となる。

研究室の選び方も重要である。この議題については、分野に関係なく「人間関係」を重視する演者が多かった。指導教員との相性や学生の数が自身の研究に及ぼす影響は大きいようだ。例えば研究室によって、研究に対するアプローチは大きく異なる。ひとりひとりの学生が主体となって自由に調査・研究を進める研究室もあれば、チームとしてデータを収集し研究を進める研究室もある。自分の目指す研究スタイルと合った指導方針をとられている指導教員の下で学ぶことが重要であろう。また、学生同士の議論ができる環境、切磋琢磨できる環境は自身の視野を広げたり、モチベーションを向上させたりするために重要である。加えて、ハラスメントの問題は後を絶たない。研究の基盤である心身の健康を保つために、事前の情報収集が重要であろう。

野生動物のマネジメントには学際的なアプローチが必要であり(梶・土屋 2014 など、詳細は前章”Wildlife Managementの定義と学際的アプローチの必要性”参照のこと)、そのために先達は野生生物保護学会(現 野生生物と社会学会)を設立した。そのなかで、我々若手はどのように学際的アプローチに取り組むべきであろうか。

まず、早い段階で自分野と他分野の考え方の違いに意識的に目を向けることが重要である。例えば、ランダムサンプリングを基本とする生態学徒は、 $n=8$ のインタビュー調査の妥当性に疑問を抱くかもしれない。しかし、そもそもインタビュー調査のような質的調査分析は量的調査とは異なり、ランダムサンプリングを前提としていない。先の疑問は科学哲学が全く異なるがゆえに生じているのである。第 27 回野生生物と社会学会大会のテーマセッションでは質的研究の可能性が発表されたが（山端 2022）、このようなテーマセッションや本シンポジウムが考え方の違いに改めて目を向けるきっかけとなれば幸いである。

しかし、分野間の違いを乗り越えることは容易ではない。他分野以前に、学生などにとってはひとつの学問分野の手法を学ぶことで手一杯だろう。そのため、ひとりで複数分野の手法を身につけるのは不可能に近い。そのため、学際的アプローチには共同での研究や調査が有用かもしれない。研究・調査の規模は小さくても構わない。ひとつのテーマに対して、複数の分野の若手研究者・学生が取り組む過程で、他分野の考え方への理解を深めつつ、学際的な研究基盤の構築に微力ながらも貢献できるのではないだろうか。

本シンポジウムでは、様々な分野の基本的な考え方と野生動物マネジメントとの関わり方について発表が行われた。「隣の畑」の考え方の違いを知る第 1 歩になったのではないだろうか。そして、演者と 100 名近い参加者の多くは、学際的なアプローチを目指す同志である。もし本シンポジウムがきっかけとなり、学際的な研究・調査が芽生えれば、これほど嬉しいことはない。

梶光一・土屋俊幸. 2014. 「野生動物管理システム」. 東京大学出版.

山端直人. 2022. 野生動物管理における質的研究の可能性. 第 27 回野生生物と社会学会大会プログラム・講演要旨集 p48.